

ふくしまから地域と環境の未来を考える

FRECC+

VOL.10

SPRING 2026

TAKE FREE

ESSENCE [フレックプラス エッセンス]

森林の価値を見つめ直す
〜地域資源から考える中山間地域のこれから〜

FUKUSHIMA

ENVIRONMENT

P1-2 はじめに

P3-6 研究者インタビュー 中村 省吾

P7-10 研究紹介

森林が持つ価値の可視化と地域主体で描く未来像
—中山間地域が抱える課題と資源活用の可能性—

P11-12 おしえて! 研究者さん

P13-14 研究の現場から

P15 お知らせ/編集後記

本誌はweb連動型!
詳しい情報はこちらから



国立環境研究所
福島地域協働研究拠点

森林の価値を見つめ直す

～地域資源から考える中山間地域のこれから～

福島県三島町は、山々に囲まれた中山間地域として、豊かな森林や文化、暮らしの知恵など多様な地域資源に支えられてきました。

しかし、人口減少やライフスタイルの変化が進むなかで、それらをどう活用し、持続可能な地域づくりにつなげていくのが問われています。

本特集では、地域資源のひとつである森林の価値をあらためて見つめ直し、中山間地域のこれらをとともに考える研究の取り組みを紹介します。

福島県 三島町の 地域資源



鉄道ファンの聖地



たっぴり只見線



奥会津編み組細工



キマダラルリツリメ



ニホンカモシヤ



アツイ!

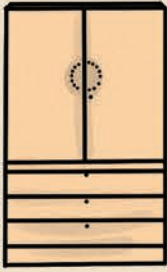


宮下アーチ3兄弟



木材

木同たんす



冬の雪はものづくりの時間くれる



雪



山菜



ツキノワグマ

志津倉山



カタクリ



ちまき



碓氷流し

3月4日



オオヤマザクラ

「合格祈願」などの系氏が貝占られています

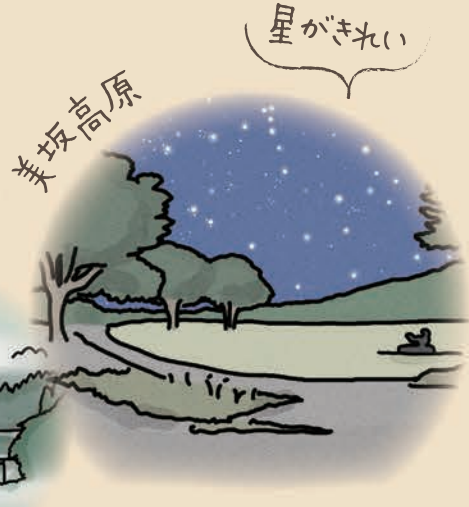


サイノカミ 1月15日

三島太神楽



虫送り 6月



星がきれい

美坂高原

イラスト:佐藤陽子
制作協力:三島町役場 地域政策課
志賀薫、常盤達彦(ともに国立環境研究所)

研究者

インタビュー



迷いも回り道も、すべてが今につながっている

—「地域に関わりたい」を軸に重ねてきた選択—

国立環境研究所 福島地域協働研究拠点
地域環境創生研究室 主任研究員

なかむら しょうご
中村 省吾

文=椿玲未



01

父の背中に見た地域と向き合う姿勢

—まずは子ども時代のお話からお聞かせください。ご出身はどちらですか？

沖縄県名護市です。私の父はもともと大阪生まれで、広島で人文地理を専攻していましたが、フィールドワークをきっかけに沖縄に移住し、名護市役所で長く市史の編纂に携わりました。

市史の編纂は、地域の人々の話を丁寧に聞き取り、それをまとめていく作業です。今振り返ると、腰を据えて地域と向き合う父の姿に、子どもながらに漠然とした憧れを抱いていたのかもしれない。

地域に貢献したいという思いが自分の中で自然と育ち、高校生時代の進路選択でも、当時注目が高まっていた地域医療の課題に向き合いたいと、琉球大学医学部医学科へ進学しました。

02

紆余曲折を経て確かになった、地域に関わる仕事がしたいという思い

—医学部とお伺いして意外な印象を受けましたが、地域への貢献という軸は一貫していたのですね。

そうですね。ただ医学部は中退し、一時は滋賀の工場で季節工として働いていました。しかし、自分なりのやりがいを見出すことが難しく、「もう一度、地域貢献につながる学問がしたい」という思いが強まり、神戸大学農学部への編入を決めました。

そこで農村計画が専門の星野敏先生に出会い、地域研究の道に足を踏み入れました。大学卒業時に星野先生が京都大学へ移られることになり、神戸に残るか悩みましたが、最後は「地域に関わる研究を続けたい」という自分の関心を軸に京都大学大学院への進学を決意し、博士号取得まで星野先生にご指導いただきました。

03

視点を変えれば結果も変わる。卒業研究で研究の面白さを実感

—大学生時代はどんな研究をされましたか？

卒業研究では、農村地域における人と人とのつながりが地域づくりに与える影響について研究しました。

フィールドには、アルバイトを通じて関わりがあった兵庫県神河町を選びました。町内の全集落で同一の地域づくり事業を実施されていたのですが、その成果には大きなばらつきがあったことから、なぜそのような差が生まれるのか疑問を持ち、研究テーマとして掘り下げました。

当初は全町民を対象にアンケート調査を実施したのですが、人同士のつながりと事業成果

との明確な関係は見られませんでした。ところが、事業の担い手である集落の役員を対象を絞って再分析すると、強い相関があることが分かりました。

問いに応じて適切な分析ツールや手法を選ぶことの重要性を学び、修士課程、博士課程へと続く私の研究関心につながりました。

04 縁がつながり、歩み始めた研究者としての道

— 研究の道に進むことに迷いやためらいはありませんでしたか？

正直、迷いはずっとありました。研究の面白さに惹かれて博士課程まで進学したのですが、その先も研究者として生きていくのか、不安を抱えたままでした。博士号取得後も、任期付きのポジションを続けていく中で、地元に戻る選択肢も含め、色々模索していました。

そんな中、国立環境研究所の福島支部(当時)の立ち上げに伴う大規模な公募があることを知り、応募しました。幸いにも採用され、福島県新地町での研究に携わることになりました。

振り返ってみると、研究者という職業に強いこだわりがあったというよりも、ご縁とタイミングが重なった結果、研究者としての道がひらけたのだと思います。

05 研究と広報・地域対話を行き来する中で得た新たな視点

— 国立環境研究所では、「地域協働推進室(以下「推進室」)」も兼務されているそうですが、推進室での取り組みについて教えてください。

推進室は広報活動や地域との対話を担う部署で、私はその立ち上げから関わっています。できるだけ現場に足を運び、地域や学校、関係団体の皆さんと密にコミュニケーションをとることを大切にしてきました。

推進室での経験は、研究に直接つながるというよりも、物事の捉え方や研究計画全体のフレームを考える際に、奥行きを与えてくれていると感じています。

例えば、福祉系のNPO法人である「しんせい」さんが運営する「山の学校」では、障がいのある方や高校生、民間企業の方など、さまざまな方が参加されます。これまで接点のなかった人たちと直接お話しすることで、多様な価値観や世界の見方があることを強く実感しました。



06 福島で生活し、研究する中で育っていった思い

— 福島県に移住され、生活する中で、福島への思いはどのように変わっていききましたか？

正直なところ、最初は公募をきっかけにつながったご縁でした。しかし、実際に暮らす中で、原発事故という特殊な背景をもつ土地であることを、日常の風景を通して実感するようになり、向き合い方は少しずつ変わっていききました。

着任当初は復興の先を見据えた将来像を描くプロジェクトが主で、浜通りへ足を運ぶ機会は多くありませんでした。しかし近年、放射性物質の影響が低減し、大熊町などの現地へ通い、そこで暮らす方々の生の声に触れる機会が増えました。

その中で自分に何ができるのか、改めて自問するようになりました。放射性物質という個人では解決できない大きな課題に対し、これまで培ってきた農村や森林に関する知見をどう活かせるか。現地の状況に寄り添いながら、自分なりの貢献の形を模索しています。

07 うまくいかなくても道は続く

— 最後に、若い世代の方へのメッセージをいただけますか。

失敗や思い通りにいかなかった経験も決して無駄ではなく、必ず次の道につながっていくと思います。

私自身、大学中退や不向きな仕事に悩み、行き詰まりを感じた時期もありましたが、その経験があったからこそ、『地域と関わりたい』という自分の中の思いがより確かなものになり、結果的に研究者という道につながりました。

自分の中に、どうしても手放せない思いがあるなら、それを大切に育ててほしいと思います。その思いは、すぐに形にならなくても、きっと将来へとつながっていくはずです。



中村 省吾 (国立環境研究所 福島地域協働研究拠点 地域環境創生研究室 主任研究員)
沖縄県名護市出身。神戸大学を卒業後、京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻にて博士号を取得。2014年に国立環境研究所に着任し、福島県を中心に地域資源を活用した地域づくり研究に取り組む。

web版でもっと詳しく!



研究紹介

森林が持つ価値の可視化と 地域主体で描く未来像

～中山間地域が抱える課題と資源活用の可能性～

地域環境創生研究室 主任研究員 中村 省吾 なかむら しょうご

文＝椿玲未

web版でもっと詳しく!



Q

「木材」だけじゃない?
森林が持ついろいろな価値

森林の管理が行き届かないことで、土砂災害や獣害のリスクが高まっています



A

山は木を育てるだけの場所ではなく、災害を防ぎ、水を守り、地域の文化も支えています。

中山間地域は『日本の縮図』

中山間地域とは、山間地やその周りの地域を指し、いわゆる農村のほとんどがこの中山間地域に位置します。日本の農業生産を支える中山間地域ですが、少子高齢化や社会構造の変化に伴う課題に直面しています。

かつての農村コミュニティは農家主体でしたが、生活スタイルの多様化が進み、暗黙の了解で成立していた地域活動の維持が難しくなっています。例えば水路掃除などの共同作業において、農家と非農家の住民の間で意識の差や摩擦が生じるケースも増えています。

中山間地域は、少子高齢化による課題と、価値観の多様化に伴う新たな課題などが複雑に入り混じった、現在の日本全体の課題が凝縮された地域といえます。

地域資源の適切な管理に向けて

中村さんは、こうした地域課題の解決に向けて、「地域資源」を軸に研究を展開しています。

複合的な要因で荒廃が進む山林

さまざまな地域資源の中でも、中村さんが特に着目しているのが山の価値です。

しかし、戦後の安価な外国産木材の大量流入や、近年の林業従事者の不足などにより林業は衰退の一途を辿っており、放置された人工林は増加し続けています。

「そうした流れ自体は時代の必然だが、どんな時代でも身近な山を適切に管理していく必要がある」と中村さんは強調します。

山には木材生産という短期的な経済的価値だけでなく、土砂災害の防止など、地域の暮らしを支える多面的な機能があります。例えば、間伐(密に育った樹木を間引く作業)によって林床に光が届けば、植物が増えて土壌浸食リスクが下がります。こうした価値を再認識するきっかけとして、中村さんは現在、木質バイオマスの利用に関する研究に取り組んでいます。

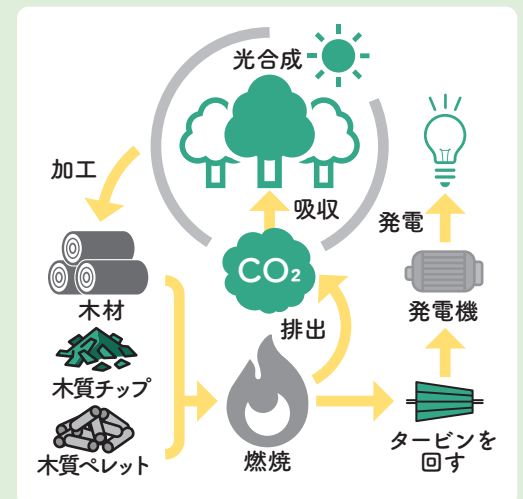
山の価値を見直すきっかけを

震災を機に福島林業産出額は大きく落ち込み、地域と山の距離は広がってしまいました。

ミニコラム

木質バイオマスってなに?
～エネルギーを生み出す仕組み～

木質バイオマスとは、使われていない木や枝を燃料にして、電気や熱を生み出す再生可能エネルギーのひとつです。



樹木の成長時に吸収した分と差し引きされるため、CO₂を増やさないとされています。

そこで中村さんは、約9年前から、三島町の山林を地域資源としてどのように管理・活用すべきかという課題に取り組んできました。

地域へのヒアリングを重ねて見えてきたのは、「そもそも森林の活用について町内で話し合う場が少ない」という課題でした。そこで中村さんたちは、町役場と協力してさまざまな立場で森林に関わる人々に声をかけて協議会を立ち上げ、エネルギー利用を切り口として森林についての意見を持ち寄る場を作りました。



森林をエネルギー活用の切り口として活用した事例である、生活工芸館の薪ボイラー冷暖房システム（左）薪ボイラー（右）貯熱タンク

地域資源の価値を整理し、意識を共有する

地域資源の価値を整理し、意識を共有するためには、地域住民一人ひとりの理解と納得が欠かせません。中村さんは、町民にとって納得感のある三島町ならではの森林の価値を明らかにするための研究にも取り組んできました。

その結果、三島町では木の皮や植物を用いた編み組細工などの森林の文化的価値が高く評価されている一方で、担い手不足といった課題も明らかになってきました。「これまでの成果から三島町における森林の価値が整理されつつあります。研究を通じて、町民が納得できる森林価値の共有を目指しています」

原発事故を経験した福島県ならではの難しさ

福島県浜通り地域の森林は、震災後に放射性セシウムによる汚染を受け、森林資源を燃料として利用できない状況が長く続きました。

しかし近年では、放射性セシウムの影響が低減し、木質バイオマスとして利用可能な森林が増えてきました。国立環境研究所では、事業者とも連携しながら、木質燃料を燃焼させた際にセシウムが灰にどう濃縮されるのかといった調査も進めています。

一方、事業計画には慎重さも求められます。他の地域では、供給量を無視した過剰な発電計画により、燃料の取り合いが起こって事業が破綻する事例も出ています。福島県

でも同様の問題が起こり得ることから、事前調査に基づいた現実的な計画づくりが不可欠です。

研究者は「風の人」

研究者は往々にして地域の部外者ですが、だからこそ提示できる視点があると、中村さんは考えています。

「地域が研究者に期待しているのは『住むこと』ではなく、『良い変化をもたらすこと』。その期待に対し、学術的な根拠に基づいて応えていくことが重要です」

協議会などの場では、他地域の事例を紹介したり、議論が円滑に進むような話題を提供したりと、外部の視点からの貢献を意識していると言います。

「地域再生のためには、地域に根付いて暮らす『土の人』と、外から来て新しい発想や情報をもたらす『風の人』の存在が欠かせません」

研究者はまさに「風の人」ですが、中村さん自身は、より地域に寄り添った関係を築きたいと考えています。

「私の研究のモットーは、地域の課題解決に貢献すること。ですので、研究者としての視点はもちろん持ちつつも、地域に寄り添うような血の通った関わり方を大切にしています」

地域の声から未来の森林管理のあり方を模索する

現在、中村さんは三島町で、町民の考えに基づき森林の価値を可視化し、地域資源活用を考える手法の開発に取り組んでいます。将来的にはこの方法を研究手法として確立して、他の地域でも活かすことが目標だといいます。

「三島での研究と並行して、浜通り地域の森林の活用に向けた研究にも注力したいと考えています。避難による所有者不在など前例のない課題も多く、研究者として貢献する方法を模索しています。地域の方々や、さまざまな分野の人たちと力を合わせて、地域に根ざした研究を進めていきたいです」

将来につながる森林の価値を、地域とともに考えていきます





森にすむ動物への放射線の影響はどうなっているの？

福島拠点で行われている取り組みを中心に、放射能汚染の問題、廃棄物、生物生態系への影響、環境に配慮したまちづくりなどの環境研究について、研究員が分かりやすく解説します。



- ☑ 福島の帰還困難区域に生息するアカネズミは、事故後少なくとも2016年時点まで、1日あたり平均0.20～0.55ミリグレイ/日の放射線を浴びていました。
- ☑ この被ばく量は「何らかの影響がある」とされる水準に相当しますが、繁殖能力の低下が懸念されるレベルではありません。
- ☑ 実際に、精巣や精子の状態を他県の個体と比較した結果、明確な違いは認められず、繁殖への大きな影響は確認されませんでした。

☑ どうしてアカネズミを調べるのか？

福島第一原発事故後30日間において、原発付近の森林に生息する野ネズミは3.9ミリグレイ/日の線量率で被ばくを受けていたと推定されています(Garnier-Laplace J, et al. (2011))。国際放射線防護委員会(ICRP)は、各種生物が被ばくした場合その量が影響を与える量であるかを判断するための目安を「誘導考慮参考レベル」として公表しています(ICRP(2008))。3.9ミリグレイ/日という線量率を誘導考慮参考レベルに照合すると、繁殖能力の低下が生じる可能性がある被ばく量となります。しかし、それ以後の野ネズミにおける被ばく状況については情報があまりなく、繁殖への影響が継続していたのか分かりませんでした。そこで、2012年～2016年の繁殖期に福島県内の帰還困難区域で捕獲した野ネズミの一種であるアカネズミ(Apodemus speciosus)(図1)を対象に被ばく量の計算を実施しました。また、2013年と2014年に捕獲したアカネズミについては、精子や精巣の状態を観察し、繁殖への影響が継続していたのか調べました。



図1 研究対象としたアカネズミ

☑ アカネズミはどのくらい被ばくしていたのか？

まず、アカネズミはどの程度被ばくしているのか推定しました。被ばく量を推定する場合は、環境中に存在する放射性物質による被ばく量(外部被ばく量)と体内に取り込まれた放射性物質による被ばく量(内部被ばく量)をそれぞれ推定する必要があります。外部被ばく量(環境中にある放射性物質(主にセシウム)からの被ばく量)は、捕獲地点の空間線量率を基に推定しました。空間線量率の測定には、ハンディサーベイメータ(HANDY SURVEYMETER Type NHE20CY3-131BY-S(Fuji Electric))を使用しています。内部被ばく量(アカネズミが体内に取り込んだセシウムからの被ばく量)は、セシウム137の蓄積量をゲルマニウム半導体検出器で測定し、その蓄積量をもとにしたコンピュータシミュレーションで推

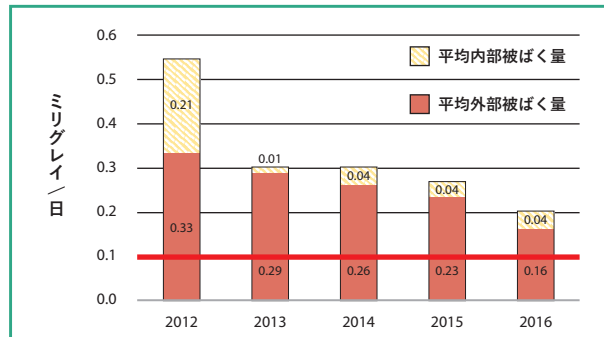


図2 帰還困難区域で捕獲したアカネズミの推定被ばく量の経時的变化 (Onuma et al. (2020)より一部改変し引用)

定しました。内部被ばく量と外部被ばく量を合計したところ、被ばく量の平均値は、0.20～0.55 mGy/dayと推定されました(図2)。これは、繁殖能力の低下が起こるレベル(1.0mGy/day以上)以下ではありますが、ICRPの誘導考慮参考レベルで「何らかの影響がある」とされる0.1mGy/day以上の被ばくが2016年の時点までは継続していることを示す結果です。

☑ アカネズミの精巣には影響があったのか？

精巣への影響を調べるため、精巣内において死んでしまう可能性の高い細胞の数と精子に奇形が起きていないのかを調べました。精巣への影響を調べるための比較対象には、青森県と富山県で捕獲したアカネズミを使用しました。その結果、死んでしまう可能性の高い細胞の数と奇形精子の出現割合に、各県の間にははっきりとした差はありませんでした(図3)。

したがって、今回の推定された被ばく量は、0.20～0.55 mGy/dayで、「何らかの影響がある」とされるレベルでしたが、アカネズミの精巣や精子には大きな影響を与えていないことが分かりました。

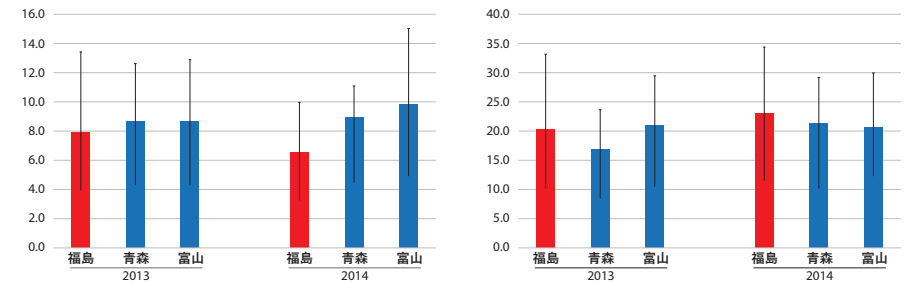


図3 各地域の死ぬ可能性が高い細胞の数(左図)と奇形精子出現率(右図)の平均値 (黒の線は標準偏差を示す。Okano et al. (2016)より作成)

- <参考文献>
1. Onuma M., Endoh D., Ishiniwa H., Tamaoki M. (2020) Estimation of Dose Rate for the Large Japanese Field Mouse (Apodemus speciosus) Distributed in the "Difficult-to-Return Zones" in Fukushima Prefecture. In Low-Dose-Rate Radiation Effects on Animals and Ecosystem -Long-Term Study on the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident. Springer, 17-30
 2. Okano T., Ishiniwa H., Onuma M., Shindo J., Yokohata Y., Tamaoki M. (2016) Effects of environmental radiation on testes and spermatogenesis in wild large Japanese field mice (Apodemus speciosus) from Fukushima. Sci Rep. 2016 Mar 23; 6:23601.

この記事を書いた人

生物多様性領域 副領域長
大沼 学

アカネズミを指標動物として、2012年より福島県浪江町で野生動物への放射線影響を調査・研究している。学生時代にチェルノブイリ(チェルノブイリ)原発事故があり、野生動物への影響について様々な情報に触れた記憶があるが、まさか自分が野生動物への放射線影響を日本で調査・研究する立場になるとは思っていなかった。捕獲したアカネズミの試料については、後世に残せるようしっかりとした保管体制を作ればと考えている。

web版でもっと詳しく!!



要チェック!



フィールド調査など実際に行っている研究の様子、講演会や学会での発表の様子など、研究が行われている現場をご紹介します。

災害に備えたデータづくり

web版でもっと詳しく!!



要チェック!



POINT

- ☑ 化学物質の事故や災害に備えるため、緊急時に必要な情報をあらかじめ集めて整理しておくことが大切です。
- ☑ 化学物質の情報はウェブや文献から、事故の情報は関係者へのアンケートや聞き取りから集めています。
- ☑ 集めたデータは地図や気象データと組み合わせ、緊急時にすぐ使える形に整備しています。

（化学事故時に必要となる情報）

私たちの研究グループでは、化学物質を対象として緊急時のリスク管理に取り組んでいます。事故や災害の現場の化学物質を分析し汚染状況を調査する、といった内容もありますが、私自身はデスクワークが中心で、緊急時に活用するために化学物質の放出事故に関する情報の収集・整備を行っています。**緊急時に適切な情報を提供することの重要性**は、過去の災害においても認識されています。2011年の東日本大震災では、災害対応を行う多数の組織から情報が発信されていたものの、それらを一元管理し災害現場へ共有することができなかつたため、十分な支援活動が行えない状況が発生したといわれています[1]。

化学物質に関しても、緊急対応を考えるために必要となる情報(例えば、その地域に存在する物質、その貯蔵量や有害性、環境中濃度など)は様々な機関により公表されています。必ずしも直接的な内容でなくとも、知りたい情報を類推するための情報や手法が掲載されていることもあります。しかしながら、これらの情報の所在や含まれる内容、データ形式は様々に異なっているため、緊急時に有効に活用できるよう整備されているとは言えません。

（環境リスク管理のための情報の収集）

事故時の化学物質放出による環境リスク管理に活用するため、「化学物質」自体の情報と「放出事故」に関する情報の、主に2種類の情報収集を行っています。化学物質については、各種のwebページや文献・書籍等からの収集が中心で、放出事故についてはアンケートやヒアリング調査により情報収集を実施しています。

化学物質といっても対象は様々で、**事故時には国内で製造・流通している全ての化学物質に放出の可能性がります**。通常、化学物質は複数の法令による枠組みで管理されており、「化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律」で製造量が届出されている数千の化学物質のほか、農薬や医薬品のように用途に応じて管理される物質、毒物・劇物のように健康への有害性の程度により管理される物質、危険物のように引火性や爆発性などにより管理される物質など、多岐にわたります。異なる法令で管理される物質は、その目的によって収集・公表されている情報も異なっており、必ずしも緊急時に必要な情報とは限りません。法令とは別の枠組みで化学物質情報を公開している情報源も多数存在します。このような情報群の中から活用可能な情報を探し出す必要があります。

（収集データの整備）

各種の情報源から抽出した情報はデータ化を行います。多くの場合、事故や災害の発生時に、初期情報として得られる情報は限定的です。そのため、**データ化した情報を紐づけて、関連情報を迅速に引き出せるよう整備しておく必要があります**(図1)。

例えば、対象物質が特定できない場合には、過去の類似の事故経験からの物質の推測や、有害性等の指標により広範な候補物質から優先順位付けを行い、対応することが考えられます。事故対応においては、地図データや気象データとの紐づけも重要になります。地震や水害など広範囲に影響が及ぶ災害の場合には、地域レベルの情報が必要になり、その規模に応じた様々なスケール感での情報の作成が必要となることもあります。様々な状況に活用可能な形にデータを整備するのは簡単な作業ではないですが、緊急時に迅速に対応するためのデータづくりの仕組みを考えながら、研究を進めています。

<参考文献> 1. 総務省 (2021) 令和3年版 情報通信白書, 259-260

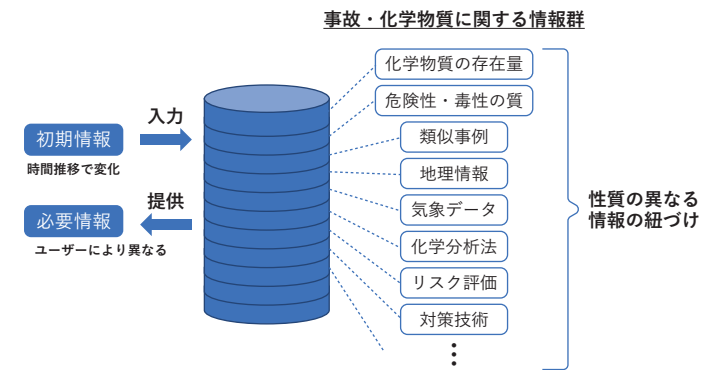


図1 化学事故時の環境リスク管理のための情報基盤

この記事を書いた人

小山陽介(環境リスク・健康領域 リスク管理戦略研究室 主任研究員)

京都大学大学院工学研究科にて博士(工学)取得。学生時代はナノ粒子や放射性物質のばく露評価・体内動態を対象とし、着任後は化学物質のリスク管理を主な研究対象としている。現在は化学物質の構造や用途情報に基づいた排出量推定手法の検討、緊急時に放出される化学物質の環境リスク管理に関する研究に取り組んでいる。

大熊町で継続してワークショップを開催しています！

大熊町ワークショップレポート① パネルトーク

2025年10月6日に大熊町役場で開催されたパネルトークでは、リーフレット『紡ぐ』を手がかりに大熊町について語り合いました。町の魅力はどこにあるのか——参加者からさまざまな声が寄せられました。当日の対話の様子はウェブ記事で紹介しています。



大熊町ワークショップレポート② 交流カフェ

2026年2月14日、交流施設linkる大熊で交流カフェを開催しました。大熊町の暮らしや自然、未来への思いを語り合うなかで、参加者がどんな思いを抱いたのか。詳しくはウェブ記事をご覧ください。



編集後記

今号では中村主任研究員に登場いただきました。いつも飄々とした雰囲気の中村さんですが、インタビューで垣間見えた、大切にしたいことにはこだわり続ける姿勢が印象的でした。研究者さんそれぞれのストーリーが研究対象への向き合い方にも表れていることがとても興味深く、ついこれまでのインタビューを読み返すことになりました。

ここ数年、花粉がきっかけで春の訪れに気づきます。春には春の、夏には夏の活動やフィールドがあります。福島拠点のメンバーはこの時期どんなことをしてるんだろう？気になった方はぜひウェブマガジンもご覧ください。

伊藤由美子

今回フィールドとして取り上げた三島町は、2017年に基本協定を締結して以来、福島県内でも長く協働を重ねてきた自治体の一つです。誌面では触れきれませんでした。月1回のケーブルテレビや広報誌への掲載も回を重ね、地域の皆さまに取り組みへの理解を深めていただけるよう発信を続けてきました。

本号の制作には三島町地域政策課をはじめ、所内の元地域おこし協力隊のお二人にもご尽力いただきました。研究所内に協働先の元隊員が在籍しているという縁も、本号を特別なものにしてしてくれます。研究の取り組みとともに、三島町ならではの資源や魅力も知るきっかけとなればうれしいです。

日下部直美

国立環境研究所 福島地域協働研究拠点

〒963-7700
福島県田村郡三春町深作 10-2
TEL 0247-61-6561
[本誌に関するお問い合わせ]
fukushima-po@nies.go.jp

福島県環境
創造センター内
にあります

